



茶話雜談

13  
2749  
1



茶話雜談

一二

乾

13

13  
2940  
/

13  
2949  
1-2



殊乃取乃さひしよ  
 是よりして 殊若を志のん  
 其 同 解 所 子 元 一 二 三 四  
 活 其 為 子 言 の 祭 負 か ち ち  
 其 更 り 誰 も い つ し 算 下



1873  
 2940  
 13  
 2749  
 vol. 1

考をいへばはるはる是と  
ころの其尾より  
既の白紙を知らず  
中と持てを  
書るべき先後の  
お

けり波はと半多の  
たあは  
孫

梅里友人類

古今實說 茶話雜語卷之一

目錄

- 一 榎木勤十良島を好みし事
- 一 孫表具際を之博し事
- 一 連飲脚猪苗代を以て事
- 一 本阿弥光悦の事
- 一 紀別殿の遊習何素の怒或鎮の事
- 一 伏見宮姫君の御例如中紙智の事

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 茶 and 話]*

一 久米瑞彦猶矢代根と得る事

一 長崎の軍記本に高島崙奴子銅砲事

一 筑前博多長正の事に於て黄金の物也

并法之し号

一 近衛准后吉田の西社衆也乃す此事

一 林乃其筆書此切を横一

一 信古白雲塔箱之事

一 殺害屋の物好の事系に記る事

一 三國の勢多と云く若新之事

一 勅製長巻の事

一 蔭給所何系毒蛇と教家其續事

古今茶話雜談卷之一

榎木勘十郎の好み

英表具師の書

夫子云古之愚也直今之愚也詭而已矣と  
しるるありし人の好むものありて  
神のみ振込一坪昔字所之糸の南に榎木  
勘十郎と云ふ人の好む古書古画  
の目利者あり世に傳ふ勘十郎と云ふ名あり

衣後、重足袋下帯、又、いり重色この袴を  
着、用し、解子、裾、柄、糸、袴、巾、袴、多、履、了  
いり、ま、て、島、多、く、い、り、半、あ、り、解、了、飲、食、大  
根、牛、房、の、袴、之、の、い、り、平、四、い、り、あ、り、  
又、解、了、せ、し、と、あ、り、是、全、く、足、を、好、む、あ、り、  
そ、天、姓、と、い、ふ、い、り、あ、り、先、家、病、も、世、り、  
あ、り、表、二、階、の、連、子、格、あ、り、と、い、ふ、い、り、  
あ、り、解、了、不、解、立、底、之、を、場、格、あ、り、と、い、ふ、物、也、と、い、ふ

け、あ、り、大、さ、な、い、り、立、つ、貴、の、木、い、り、け、貴、の、木  
若、貝、此、底、多、く、い、り、底、の、大、密、あ、り、と、い、ふ、細、き  
紫、折、底、行、あ、り、と、い、ふ、い、り、の、い、り、又、解、了、  
泉、水、い、り、是、全、限、魚、殺、多、故、一、色、也、不、分  
指、間、の、二、階、い、り、格、子、成、り、け、い、り、い、り、と、い、ふ、い、り、  
其、此、さ、い、り、い、り、高、欄、を、い、り、中、底、の、少、面、隣、家  
の、解、了、あ、り、是、を、白、解、了、い、り、い、り、一、面、い、り、是、終、了、の、い、り  
水、を、解、了、い、り、い、り、二、階、い、り、一、面、の、い、り、南、水、の、平



碁をゆく絵あり天井ハ紙張天井ゆく絵を  
つせえは津里之尺斗里ある大糸鏡を  
取り入意の里今も古風神の物好きめく  
ゆきー又い此鳥丸四糸のふき表具際太き傍  
とよ人阿里是も吳祚の人物あり長き鳥  
巾をりより解織おきつてを竹の八人こりる  
は枝舟の杖を携へ、腰は白銀の瓢箪あり  
大巾の袴を掛け是、酒肴やうの物を入意く

風日長向るる日ハ祇園清水まゝハ小舟  
お伴も友り多く、獨り、舟にこみ、まれ  
し祇園を西門の石階の上成ハ清水比ま乃  
宮の宮路あると、な、眼鏡をとめて、往來の  
人とのせし又懐中にも名画の小軸をこし  
竹枝れ枝ありて、海に入里の腰る酒肴  
ものあり、獨り、飯を傾けし、新人も、配を  
容あも、是を、い、孤仙人の、是

その人物修らざる者ありて実りけ  
風流と目く面白く是ゆると見し  
ら六中く他の若くはいそいそ  
人ありて画もよく見利せし人あり

連歌師猪苗代急心半

仙臺階奥守殿ふ猪苗代急心半  
何りいそいそ京那ふ何りいそ  
入つておのりあると仰見入せし  
連歌の

はなありとして毎夜は思ひたはされし  
ふもは病しふひ病しうらるる或時  
是とて入道北陸はあせん外山  
け歌をよみせし人もは病しと  
ふ念殿をいそ明日應山公去  
歌としては鏡又入道とされし  
かの世とありしよりいそいそ  
此歌は初めをいそいそいそいそ

稍應山公直

あり但連歌の口気ありと作進一是れ  
兼以も家我形海とありしと申は西行の是  
より私の歌を毎夜連歌に作進し  
連歌に歌合とくは別は有海一さよは情  
さ申とありしと申は西行の是  
歌の格も西行の是れ一に海とありし  
申は西行の是れ一に海とありし  
西行の是れ一に海とありし

中と一六のいふも結ぶ意得ありけ歌一神  
らありしとありしとありしとありしとありし  
山の指之なりとありしとありしとありしとありし  
字あり結心は海一是れ西行の是れ  
西行の是れ一に海とありしとありしとありし  
海とありしとありしとありしとありしとありし  
海とありしとありしとありしとありしとありし  
海とありしとありしとありしとありしとありし

本阿弥光悦の事

青蓮院宮尊純法親王常し法門中、  
作しきしハ皆ハ蘇古能めく能也より其  
何れも古人の筆法よりみくける事凡何  
其そ自分一家の流をみかへし凡中これより  
作しきしハ追清齋山公の後の流に仿し  
阿弥光悦は之を各一流をみかへし其  
何れも元來ハ此流をみかへし其流の皮

を得近清齋ハ肉を以て光悦ハ骨を得たりと  
あり或時光悦坊近清齋ハ筆りしハ齋山公  
の作より代天下一筆法を得たり其ハ誰也  
マと云ふ所の能はれしハ光悦坊を以て先ツ  
とし次ハ即前之番ハ齋山坊四喜又書ハ誰  
くとし次ハ之ハ時應山公の作より先ツし次  
の二書より先ツし其先とはたそと云ふ  
有りしハ光悦ハ云く恐るる事私より



あも見しつゝの殿却く不便な事  
さるせり子共の事あると云ふ  
と子連ぬこじよあは合せし  
ぬこれの有り能く孫も  
あ次、退かさせりうた  
進す想して人の怒を静し  
つゝあはしり

依見宮姫君の西側女中純智の事

依見様の御姫君様江戸  
何れ或日暮るに御殿  
の亭より物を取返し  
それ又御侍の事  
西側女中一人の女中  
御殿の御小袖を  
とて御殿の御小袖  
を御殿の御小袖  
とて御殿の御小袖  
を御殿の御小袖

と来里五條りよハ五條をさそせ五條先の小  
袖ハ手万小被さぬと作らば一ハ申申  
領の小袖を部をめて中層斗りめて雷を  
石少りけと五條は白く六條はけ作とほそ  
よ入里一もや別の小袖を白くせそ小袖は白  
はくん是を急もとく又おれを白く女房  
の由の具をさ海子風流の小袖くさや  
五條せ一高而機場よりあひ面白とけり

久米瑞庵稿矢の根をいふ事

瑞庵は久米瑞庵と云ふ外科醫者の名  
え能く長河此産あり長河又五一時自  
分の山は五極古木のたる枝の樹を  
板と扱せんとして木扱は六條あり扱せよ  
木ふる里何分扱す大條の目も扱せ  
火入木の産はもつらつらと産ある事  
ありとて研せんしよ八節乃朝と鑑つや

は影り道し一なるは希代の物なりとて極  
すけは遺は月ひ今よは居向まつけあとも  
長崎の奉行所を山崎崎本に廻す  
あさきしし

先年長崎阿茶院舟屋名一貨物賣  
立く帆帆の時公儀に重敷多此廻を下  
さき奉行所の門外山の如く積をしよ  
一人の真崎奴いけりて積の積しをてさ

めくと悲泣せし奉行所をいよ  
より通洞をいよ旅子存子さすし  
崎奴う云私平國且くし終の者めく時度  
荷をさびたし一廻一本は一生涯を賣切く  
身もいかりかく斗ち切るぬり本よはい年  
は山よ者かやと不覚此洞をるすしかせし  
所奉行所を名をいよはく廻本をいよ  
一六六は終る失終るし悦ひるる



聖年阿ん之私又是是存也一書人通  
詞心之平行、此禮より度由中程之乃  
珍貨と禮也と、礼は出さるゝ私書ハ  
去年西平江より大方の銅をたせしの史所  
所止自由なる里を附度をもつて度は禮が  
了了貨物と仕ゆり布、渡海仕の連返るゝ  
恩を謝らるゝは礼ありと、銅を産する事  
知るゝ

龍前博多長正寺小龍、黄金の鳳凰  
法馬を抽出せし中

龍前、の國博多、長正寺といふ所、ゆり、在  
是方、此先龍より代への墓ありし、其の  
水つゝ、毎に換申、又、その龍は、改  
桑也、又、己、又、首、地を、堀、造、し、在、又、え、り、り  
下、小、大、分、此、龍、書、が、所、人、に、悟、し、に、程、堀、也  
し、これ、大、分、の、産、也、が、是、由、也、高、龍、書、

大さの重さ中々足見の黄金の鳳凰一雙  
 目龍其目黄一雙丸の環の振るる人三重紫箱  
 とありまゝ、金銀此法馬鞍十有重法馬ハ系  
 一也せ張班みく代りく代銀元百千目  
 斗此由右の執事在中とみ出儀執事  
 為る物ありとも裏地を重出とこのありハ  
 寺此資領に仕る為とてとれり所重  
 金匠より考へ京上重金匠をり行

金 2-1 あり  
 無斤四百九十二文  
 客南 謝福  
 花銀肆拾捌兩重驗銀近彭額  
 長四寸五分厚九分

金  
 無斤四百九十八文  
 經歷郭德閣  
 行寧宣政院福建分院  
 提調官副使矢監

金  
 以斤百三十九文  
 長二十六分  
 厚七分

大三ッ小五ッ八有斤目石同

世件或曰筑前福岡山福寺あり此寺ありん  
と云徳四年甲午六月あり

近清准后吉田に社名書道す此寺  
いつの由や近清准后吉田、由業詣極つた  
し此依は此書入の志醫師と云ひ近野の竹  
六人互連らして吉田より河下繁ありて即家  
乃めく志如堂、由業詣極つり及近北業店より  
小女とて立出ぬ立寄らるれり也即酒めさ

是より或はまゝに豆腐餅やりの也云され之  
也家也よかやひすくつりり里准后の作  
りたり親しき源さとのたふ、後移せよ  
と云依此書之作りたりきし此件は醫師此堂  
よりしりくし人こ、是く通し是名老人方ハ  
下旅の更此存念なく此可憐なり年知長  
以度入道也これ吉田神樂園の書り社、  
西郷元よ此社名あり

林道春漢宮此切を横に〜事

林乃善ハ元來至又三帝として彰田錦也  
多し此町人の里幼少の里聰明多し学文  
を好し〜其時分ふ板本の書も少く大に  
此書籍多し官家歴し此文庫のの秘  
しあり〜史記〜本何れ其讀見夜心  
ハ道〜かと知らるる〜夜又漢語角  
倉在田了意り許は史記何〜一及ひ立

越、慈皇昔かと中〜借外さる連〜聖  
まは〜始ふ以万、年り〜讀〜中〜れ  
〜ハ家身此好る是ハ何と於一冊に帝本  
〜坊下〜此の根又下〜れ〜其去親切を  
感して史記一冊を毎日切は信〜切〜る岩  
不坊坊り〜屋敷とも書寫せ〜き〜五日く  
〜漢語坊り〜全部去字〜今〜は史記  
の字本林氏の書纏〜〜有也嗚呼古人

乃昔字新の如く宜うかき博文強織実  
は一代の大儒を多し羅山文集を撰す  
去方より里神血贈呈し返事不忽卒は詩を  
賦し血の如く凡そ件を引進し血を乃  
狗中太車も飾りし如く

性言白字垢箱之中

應仁文明の比兵乱あり世代中一日を静  
なるに如く京都に我園の場として内裏乃

あり極衰微愛ふ極りぬ是も依り大徳大  
祀を中く行なはれたる恒例に節會と  
いとも微りある事之世の公卿白小袖信丹  
ひれをせり束帯の時ハ下着白字垢箱  
世代里白字垢箱より貸し信りし事  
有るけ白字垢箱今も衆者大に普通通の文  
箱の如く何れそけ箱ハ小袖の合らんと云ふ  
は白字垢箱と云ふ事小袖のしる標なりけ

襟を小袖は中として袷東に下着ふ用ひら  
進くとせ終の結の襟之者不扱ともく  
よひは信り用ひられ半形庭の袷襟之  
ひ多し一は文箱如き箱を仕度箱箱と  
ふ事ありしと名祿あり 東照君の時  
御前々若下此等妙百され 團扇西後  
をふ白小袖を三つ重のくさるる  
神名西後ありて 舌方ハよき小袖を教多

重の若くるとして 襟をひく見あふ下  
急二ツ木綿の布子よ白結の若くをひ  
くり大菊ひなとれくむりく一登何と  
る向りし西貴貞徳とれしとあり  
教多屋此物好を茶湯此祝存の  
或人教多屋の庭物好を利休存の  
古詩の一句めく若く一昔昔日存自  
無塵又小物遠は中庭 若祿一小登与よ

て暮ららむし一眺月夜海少くあり本北男  
又宗旦、同し一是、方、あまき、暮らむしと  
好んむと先き見れは、う河、秋、の、山、ち、也  
よ、雨、る、を、れ、い、詠、く、同、一、系、北、湯、の、和、尚宗旦  
なれ、よ、の、好、を、ん、ふ、か、る、中、な、る、生、川、利  
体、ハ、燕、玄、行、く、孫、ま、さ、れ、い、り、を、列、宗、静  
の、歌、涼、く、相、さ、し、し、る、と、宗、旦、ハ、口、ハ、侍、竹、と  
細、なる、年、ハ、心、行、く、好、り

三國の鶴聲とさく名所記

江列中山道拍原の帝北東ふ山川有是江列  
と、英、濃、と、関、境、あ、ま、く、負、流、と、近、江、森、也、流  
と、世、ま、し、又、山、珠、八、橋、北、西、橋、本、の、下、ま、全  
橋い、川、を、含、り、廿、橋、より、東、西、限、り、山、城、河、内  
の、堀、川、あり、又、い、川、向、ハ、上、牧、村、鴨、及、村、と、く  
橋、津、玉、な、り、け、橋、邊、の、人、ハ、三、國、の、鶴、聲、を、少、と  
い、里、さ、も、こ、や、河、く、免、森、也、く、さ、う、不、能、對、白、ん

勅製家柄くのみ事

中御門院勅製也を或人かくし進一なる

の四款

秋風のほく八家此詠を如し

萩此うと我ふ八礼進て整ち歌

是を月と解なり心八上句は也の詠なされし  
つ文字も重下句もさのうのば成りしを  
はら文字ぬるゆゆ所と解となり出云なる

たそ此御聖作なれとも文珠も是八詠のよ

より 法皇御所もなるを好極はされり

勅作も極なれしと少四圍の行名世かそを

麻糸と細く心八の波濠波停務土徳とれ

るく世名あり又清智ふる行るの智とけ

つらぬ別きの名ハ如く世名も其の句と車師

耕うし下句とげか進うしと細る里まて

びびび光國の刀と細く備前伍中備後



之玉のりく居あり 是の 法皇勅製のり  
る

蔭絵所何某毒蛇を教へ家屋を

お續せし事

室町通のふふ山と子不ふり世阿彌大家  
ゆり殺十年廢定と有り任人ありし毎く任  
居ふも年そくる里此ゆはひりく死身はゆ人  
人思ひてのそくりのもあく後まの人よそ共

とい者唯人ありてふ隣町ふ蔭絵所者  
價ありたてんきられり家ふの任じと子  
か多幸ひし申して譲りやぬぬ老人の情  
町ふ並肌つゝ家とつゝ海へ掃除を毎日隣  
町ふ里かふひ奥此一間あり繪を書指し合  
申茶おし隣町よりお申して二月えりり  
らりり内いして何の怪しき申肌く大屋敷  
地所裏より大根作りをそり一日ふ若まひ

大根引せ洗つせりし〜長井戸大傍の六尺  
斗り大石有いし大根を垂し大石よ  
り湯家の女と相立を人何ゆししては石、  
水をけつてせえし〜相立あり石の  
下あり怪しき事として彼是人を集めて大石  
を掘せられ根こみ深く七八尺も掘りて見  
るハ底も何やら異く怪しきものなり〜  
相おぼして町田一人をとり大物あり

手傍を掘りて見ハ背黒く腹赤く眼怒ろ  
〜大蛇と見〜お是ハ少供〜毒蛇を  
らぬお逃してハ大蛇の人の害ありんとて井  
の蓋を〜お逃し四方は板圍して大物  
の毎は舌口態は根の如く波石を大繩  
て引起し忘り付大丁二尺あり長七八尺も  
何ん大蛇の如〜ありと云斗りあり〜あり  
こち走馬早り〜りと大物あり有ぬと云

たぐりたる教へりし深山の理しと云又  
淀川、狭しと云ふは後大石ハ勿論也  
乃之を掘りて井ハ決て全前経師ハ是より  
以衆、移りて何事なく子孫中々と長  
命なり人皆ハ老人の如く長き事と云ふ  
は、是

古今 茶話雑談卷之一終

古今 茶話雑談卷之二

目録

- 一 醫脚有る涼及り事
- 一 涼及茶碗或買得し事
- 一 涼及茶包市古馬の素は長刀或呉酒事
- 一 京保年中紅毛人紙上物事
- 一 西本願寺石築寺鐘子浦水見物事
- 一 神皇苑鯨波の屏風の事

- 一 河上使多象宗 故実成を里思ひ
- 一 吉原傾城九重
- 一 市川園十郎浪節の足跡
- 一 奥丹波恋多虫の女房
- 一 左甚五良程我彫刻
- 一 楠正行

古今 茶話雑談 卷之二

醫者有る涼及事

あり涼及ハ醫者有る精々其名世に少く  
 物見とも生得を我儘者あり有る事  
 名醫あり人を治す一とせ松平安藤  
 及 蘇州廣徳 右切の病あり 京都あり名醫  
 也撰ひ下し以て玉に重役とせ  
 京のありあり集會し

醫者我々も又源及より一決せし 早速使者  
源及宛一紙を以て行しよ 亦其源及も猶居  
しり平生徳を好む所假面を以て徳を視し  
居りし使者も對面し委細使者の執成り  
いりし其の事も 齋信も 互に其の病人あり下  
向ふ可らざるも 我出申樂を好し 近々徳成  
よ 辭を以て夜は下を海しりし 且使者云  
を 徳の西僧ハより年より其の事も 又ハ西僧の事

病人の事ハ左切あり 玉玉の性命一玉の難儀  
よ 柳の枝よりハ 逢ふ 西僧向希ハハハハハ  
能の事ハ 快意以申す 亦方々く 役者其  
中日の向旅も 信守中 尚も 是れ  
西僧客より其の事ハ 納りし  
其の事ハ 向せん 其の事ハ 程中 亦 徳  
其の事ハ 其の事ハ 約し 俄も 月  
其の事ハ 供者 其の事ハ 大なる 悦ハ 別 快 松













ありし御うかりとて一却とて送致の儀と云  
へと申す長方と云ふは形そのとてなり  
とてのゆゑなり

享保年中紅毛人敵と物と事

一阿蘭陀細工築の箱甲細工張り多也 云

一曰初より張張り多也 云

一硝子徳利 金張り多也 云

一夕フエシ中シ他曲最シワホクノ類云

一金浪針金細工の箱 曰張り九也

一硝子大樽等 云々々々々々 云

一曰形少形 一曰形菓子入 一

一曰形蓋 コツキヤニ形 一

一曰形八角形 一曰形四 形四

一曰形鉢形 一口ウサノ油十徳利

一名酒 チニタアラキ 十五徳利入二箱

一油 合戦の目獅子丸の目二枚

一 小形のつんばね つんばね工 被

一 大時計 言さ四天外いとり 張内々時半何う

一 上の扇屋又号も知いとり 張内々人形十五

一 樂成之く踊り号中 神号蛇務のや

一 又く又明物多系 何う

一 キヤマニ形硝子油利二十六

一 懐中時計 一ウニカフル 長七尺二寸 二本 根号り此多包有

一 小石火矢 着少乃多原 一挺

一 河葉院焼 ちりく 十二組

一 水昌燭屋 らりく 九十五 是

一 馬具 一拵 一千二百 酒 或百十二壺

一 らりく 二百丁 一馬車用 六疋

一 豹 高三月生さ以下の一疋 六之の心之疋、車をのり 連踏 足毛長十寸半

大和ののちさき毎、  
新生多て其羽御

一 エニカウ二疋 一山猫 但形ハ豹より馬く之長

一 猿 但小猿 細長く尾長し 大巾二疋 一疋

一火喰鳥 一羽 一車 一輛

以上

馬車正馬一引せし  
長馬牛横二間内  
級知ろくと張全張  
針金細工足車あり  
車三流のりし  
長馬面は皮皮あり  
紐立りし馬車一引せ  
馬車ありし馬車  
おし流し馬車一引  
せし馬車一引

西本願寺石築又就築子踊出流し事

享保十六年八月廿八日西本願寺今夜大  
坂西堂石築の踊子舞出流し入夜中  
大坂搦中より踊り出し少くも此踊りといふ舞  
子共数多上里より至り本門に新口より西堂に  
印院家坊安流家中講中者右流し見  
物しおそり子七人種々の衣装あり一舞子  
おそり二舞子あり新口より西堂に

松井七郎善曲鞠いそよハ竹田也を以て  
芝居以上の親父おまの踊ハ真多て面  
白く心なまじりとも七良善とり也鞠の曲親  
父の口上事又新善書とやん乃以程云め  
あま事りつしお合息まの思燕を伴ひ  
早く百連取りしとそは菓子るをりさ  
あ首尾まじりしとあり想しる者人大  
人の思あるとハりさぬのりとも或以芝居狂

云傳ハ一つも通を思ふと知らく

鯉波の屏風の事

神皇正統記也鯉波の屏風といふは狩野  
元信筆まじり名筆あり金砂子中粉を  
一双は保え平治の圖也志願殺者之呼者  
影をより前作馬の色を異なり希代の珍  
画あり芳東福門院様、岡東より進せり此  
しつと絵の種格等朝清皇院の御所繪付



ありき録のち名ありと大目の作法あり。  
明く故書も、つんとありて、こ世縁務  
なり也

吾系傾城九垂事

江戸吾系傾城九垂事、女良先年、以代皮、由永  
又書及、子代、来妻、う致、さき、し、而、又、彼、夫  
あり、と、改、易、う、何、の、意、持、持、り、と、道、し、し、り、  
妻、の、吾、系、く、ち、と、道、り、久、し、く、居、と、重、し、し、

口以古々系のもこととみつて

かきりありきき東は角田川

終息流是河い川、ま、く、及

吾系、吾主、感、を、堪、く、す、  
即、公、儀、一、流、く、出、縁、有、  
又、致、度、と、以、影、中、と、く、の、不、便、又、也、  
百、以、女、成、  
吾、主、妻、よ、ち、と、き、ら、る

市川園十郎浪指の足踏致し、此、事

享保十五年戊辰四月廿九日、芝居見、多、く、以、後



是是方口人同心八人互芝居子成水取  
而中村勘三郎芝居者市川芝十市  
銀箔の是結成を粗云いづら成兄分の  
方兄智め是結成を之芝居者成神一乃  
是は成て五月二日在存勘三郎家五人  
銀箔を弄ひし役者芝十市百知を以て沙  
よあはく原はてをて一換て夜園十市  
是結成法成の銀箔を弄ひし役者

よは英麗の方成有しと方作は成  
ゆあは衣類も全銀の箔を弄ひし役者  
仕へる所成りは成りし部成中成り  
よ想はて先成り芝居の芝居者箔成  
ゆ事一成成り成り成り成り成り成り  
神事成成り成り成り成り成り成り  
箔成成り成り成り成り成り成り  
園十市成り成り成り成り成り成り

先年の古是弦を相細ひぬく 月入中の故  
切符中さ中少潤法之候誤りありゆ中開き  
是あり方下弦の賣不也も味持り  
河津くもさ中中人き事と計年八公少少控  
又さ下中中一は是又依く計度ハ此有欠  
ありれ向後急交有候は此法度之衣類等也  
お堅く仕り中一さ方御見ささき  
一也字御事り中一素人日あは心持

遠ハ有者ハ股ハ在ハ以度父の恩と中 誹語  
の書板行仕書為とのありは然里とてと也  
つる人書也初めく重之とも老りさ片ハ為十序  
舊板又仕り新ハ初り中 船ハ得丸早竟  
板行初めく高賣仕ルくは停止作行る為く  
ゆきとれなと川と中 約く 不備ハ  
御事とも由證あり後者仲男 配分仕ハ故  
無相云書板行口あも唯一 一ハ

吾分多所管女等しり右の禰沼の女も  
死する後志の解名を取つ 院号養号  
飛土号成名は後号はく 貧僧の号那と  
その金限ありし事 後名も無意の号  
を伴せし中めや 後考より考ふ所の如き  
侍りし号那と考ふ侍りし又禰沼の宗道  
の名成女取つ 連成中 加ら後号はく  
不修あり宗道ともありし侍人教人の如き

及ひ其の有宗道は乃をまんに禰沼師  
等門才とて後志中世の連成は加ら其の  
或ハ是の何る事 其の如く 向後号はの如き  
心得ありし如く 其の如く 宗道は其の如き 姓名全圖  
十部と書ふありし中世也 以上

奥丹波百姓の書意多虫の病に事  
四条坊門油小路の東に何りと名しる  
若くは芝居に世物も産業とせり此の如く

有り云くハ先づより奥丹波の何とやいふ  
家、子哉多うけ下の百姓の妻を平斗の  
如房應而虫の病人の如く少及ひんせ  
物の形誂も流し二之を逗留せし由妻の  
と對侍也しいりあは後中より病人の移な  
愈ししと云云也あめ如くし子事分明も少  
ゆるしし流しハ家め希代の事あるはや  
其まのりくもよし先年家月事初六条の

本形支連の有り茶而もく悟れく体らひ  
し由初め如く後中より物のしりも  
群集の系結人悟んく何うも同流らひし  
うゆくもく和しく思ひて杖をま石連  
ゆりし嗚呼せよハ物しき事あるは  
非るを醫書も教多か愈多虫の病條完  
ゆきと其もつりといふはもく天地の  
廣き何處より見す及り思物ありんや

物類いろいろ六自分の見方のせまき、  
まはなりまは見を物の形ひりあひさうし  
めや所伝も何——是も元文三年の事

丸甚古布鯉戎形刻り寄金世事

丸甚古布とよ形六名人の名入り天正  
年中一人あまき市家町六角と所よ指任  
せりい町毎年六月よ祇堂會出る所の鯉  
ハ古をの云傳くよ昔ハ鯉の人玉作と竹籠よ

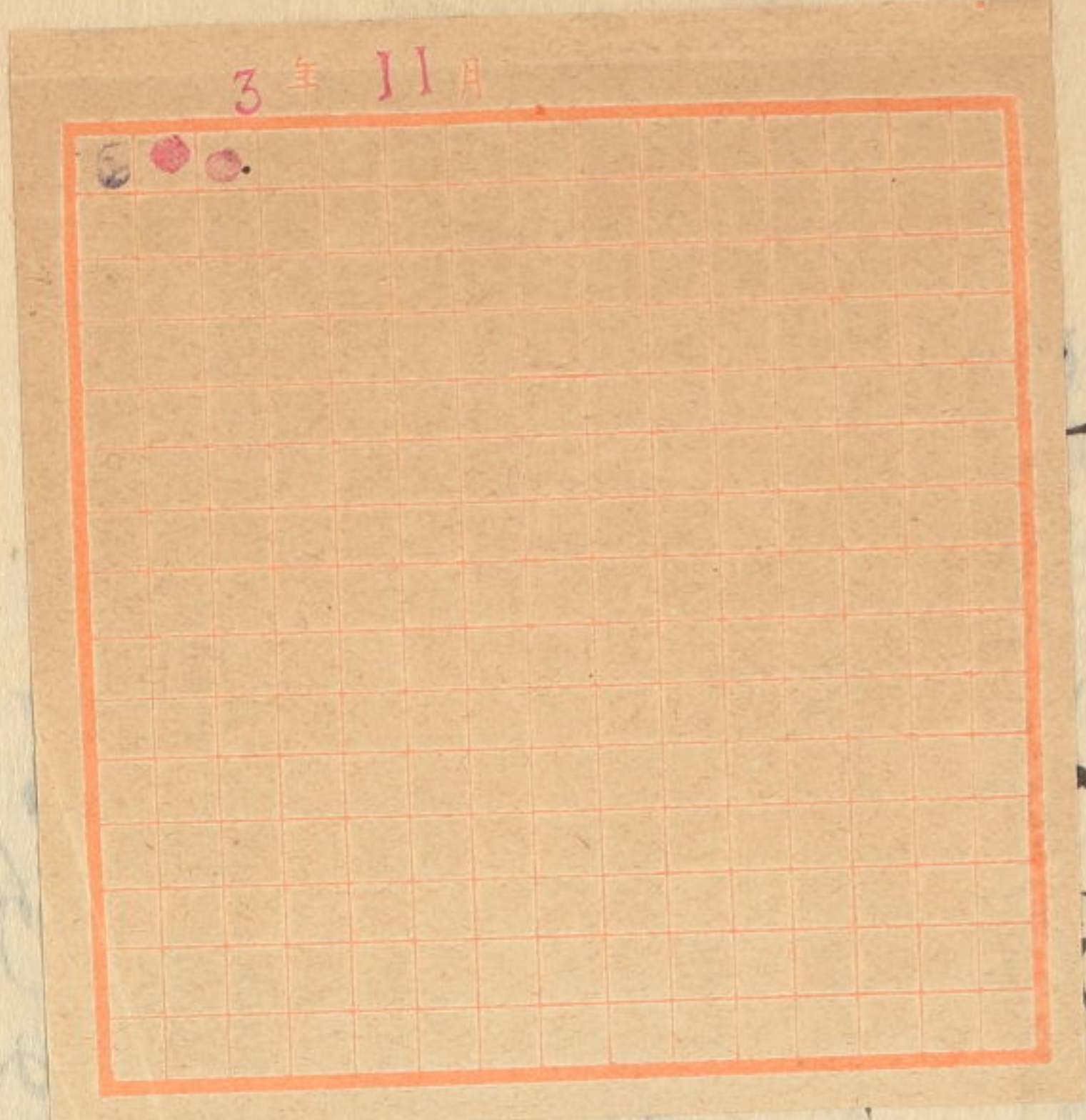
つくま、鑿形波の布まき包こ多りよし  
せりとる里刻りよ甚古布任長く後刻り  
爲れりよとて良我を撰り鯉戎一形形刻り  
よ寄金をり刻り今祇堂會よ出る所の鯉是  
り中りく此作よつゆ六々金鑿さるり  
能動するりや

楠正行年英年の内伝と事

後醍醐帝よ徳——年の内伝ハリ世古の年



12  
7  
=



天下南朝一統之海也凡曰天運為之何  
以終之南朝正平四年正月有河內國四條  
諸死也子時廿五早惜也

德卷之二終

天下南朝一統を海内は又天運為の時より  
以て終る南朝正平四年正月五日河内國四糸  
絶子の合戦は討死せり于時北平軍惜む  
る人ありきや

古今 葉語雜傳卷之二終

12  
17  
11



